

A 13

新しいシイタケ菌床栽培技術 3—促成栽培における品種別発生パターンの比較—

◎枝 克昌、山内 隆弘、木下 新栄、田口 貴一、鮎澤 澄夫、井上 貞行
(株式会社 北研・食用菌類研究所)

New system of *Lentinus edodes* sawdust-based cultivation.(part 3)

◎Katsumasa EDA, Takahiro YAMAUCHI, Shin-ei KINOSHITA, Takakazu TAGUCHI,
Sumio AYUSAWA and Sadayuki INOUE(Edible Mushrooms Inst.,Hokken Co.,Ltd.)

[目的] 新しいシイタケ菌床栽培技術である“上面栽培技術”における品種別発生パターンについて検討した。

[方法] 広葉樹オガコにナバチップを容量比 5:5 で混合したものに、栄養体としてシイタケ短期栽培用ニューバイデル(株式会社 北研製)を培地重量比 10%添加後、含水率を約 62%に調整し、常法⁽¹⁾により、2.7kg 菌床を作製した。殺菌、冷却後に試験品種として北研 600 号、北研 603 号、北研 607 号、北研 71 号を接種して 18~20℃設定の空調培養室において所定期間培養を行った。培養完了後、27℃に設定した発生室に移動し、3 日後に栽培袋の上部を切り取り、7 日間高温抑制散水管理⁽²⁾を行った。さらに、7 日間給水管理を行った後に、13~20℃変温下(12 時間サイクル)において、発生管理を行った^{(3)~(5)}。

[試験結果] 120 日培養群においては、品種による発生パターンに明らかな相違が認められた。変温管理と散水管理という発生操作により、北研 600 号では、順調に子実体の発生が継続し、2 ヶ月間で 650g 以上の収量が得られ、子実体 1 個重も 25g 以上を維持し、品質も良好であった。一方、北研 603 号、北研 607 号では、北研 600 号と比較して、前述の発生操作に対する反応がやや鈍く、子実体 1 個重が 30g 以上と大きい反面、芽数が少ないために収量がやや少ない結果となった。また、北研 71 号では他の 3 品種と比較すると、発生初期~中期における子実体の発生が低水準であったため、最も収量が少なく、促成栽培のような短期間の栽培にはやや適用が難しい結果となった。この他、培養日数別発生パターンの検討結果などについても報告する予定である。

[考察] 促成栽培においては短期間で目標とする収量を上げると同時に子実体の品質とのバランスを採る必要があるため、品種の選定や菌床の培養熟度、発生管理技術という点が重要になる。ところで、新しいシイタケ菌床栽培技術である“上面栽培技術”におけるメリットは労力を低く抑えつつ、良い品質の子実体を採ることにあるが、デメリットとして発生期間が長くかかることが挙げられる。しかしながら、今回の検討により、品種の選定と発生管理技術を駆使すれば上面栽培技術が促成栽培においても有効であることを裏付ける結果が得られた。今後は、北研 603 号、607 号における発生管理条件の最適化と共に、上面栽培により適応できる品種の開発について検討を進めたいと考えている。

参考文献

- (1) 株式会社北研・食用菌類研究所:「菌床シイタケのつくり方」、農山漁村文化協会、P67(1993)
- (2) 枝、他:日本応用きのこ学会第 1 回大会講演要旨集、P59(1997)
- (3) 枝、他:日本応用きのこ学会第 3 回大会講演要旨集、P41(1999)
- (4) 枝、他:日本応用きのこ学会第 3 回大会講演要旨集、P42(1999)
- (5) 山内、他:日本応用きのこ学会第 3 回大会講演要旨集、P43(1999)